

Louis MacNeice Centenary Conference and Celebration 見聞記

Louis MacNeice Centenary Conference
and Celebration at Queen's University Belfast

亀 山 幸 枝

Yukie KAMEYAMA

きっかけは *TLS* に掲載された小さな予告だった。

To mark the centenary of Louis MacNeice, the Seamus Heaney Centre for Poetry at Queen's University Belfast will hold a "conference and celebration" between September 12 and 15. Those scheduled to take part include Michael Longley, Derek Mahon and Paul Muldoon. The conference fee is Pounds 75; poetry readings are free but by ticket only. Papers on MacNeice are invited.⁽¹⁾

ルイ・マクニースに特に関心があったわけではない。それどころか、マクニースが北アイルランドと関係があることすら知らなかった。この学会（および祝賀の催し）に興味をひかれたのは、マイケル・ロングリー、デレク・マホン、ポール・マルドゥーンといった「大物」の名前が挙げられていること、また、ポエトリー・リーディングが予定されていることからであった。アイルランドでのこの種の集まりには南と北を通じておもだった詩人が参加することが多いのである。また、これまでのアイルランド訪問が南の共和国中心で、北アイルランドはほとんど未経験だったこともある。クイーンズ大学シェイマス・ヒーニー・ポエトリー・センターというところにも興味をもった。アイルランドで2人目（4人目という数え方もある）のノーベル文学賞受賞者の名を冠したセンターとは、どういうところだろうか。

シェイマス・ヒーニー・ポエトリー・センターは、クイーンズ大学英文学部（School of English）の中に設けられており、スタッフは総勢13名（2010年3月現在）、うち9名は英文学部のスタッフでもある。ディレクターを、ヒーニー世代に続く北アイルランドの詩人の中でも第一人者といっているキアラン・カーソン（Ciaran Carson）が、アシスタント・ディレクターを、研究者のフラン・ブリアトン（Fran Brearton）がつとめている。特徴的なのは、ディレクターのキアラン・カーソンのほか、詩人であるメーヴ・マガキアン（Medbh

(1) 'N.B.', *The Times Literary Supplement*, April 13, 2007.

McGuckian) やシニード・モリシー (Sinead Morrissey) をはじめとする実作者が全部で9名も名を連ねていることである。ここでは研究活動のほか大学院教育も行なっており、文学研究以外にクリエイティブ・ライティングのPhDとMAのコースを提供している。センターの設立は1995年のヒーニーのノーベル文学賞受賞以降と想像できる。設立にあたっては、アイルランドおよびイギリスの現代詩研究者として有名なエドナ・ロングリー (Edna Longley) が中心的な役割を果たした。彼女は現在クィーンズ大学名誉教授としてセンターの一員であり、事実上運営の中心的役割を果たしているようである。

拙文ではルイ・マクニース生誕100周年学会について報告するが、その前にマクニースの生涯を手短かにたどっておこう。

ルイ・マクニースはチャーチ・オブ・アイルランド (英国国教会派) の聖職者であるジョン・マクニースの3人の子供の末子として、1907年ベルファストに生まれた。翌年一家はベルファスト近郊のキャリックファーガスに移り、ルイはこの町で10才まで過ごす。1914年には母を病のため亡くしており、このことがマクニースに大きな影響を与えた。1917年、彼は教育のためイングランドに送られ、名門パブリックスクールであるモールバラ・カレッジを経て、1926年、オックスフォード大学マートン・カレッジに入学している。パブリックスクールからオックスフォード時代にかけて、ジョン・ベチェマン (John Betjeman)、スティーブン・スペンダー (Stephen Spender)、W.H. オーデン (W.H. Auden)、セシル・デイル・ルイス (Cecil Day-Lewis) らと親交を結び、特にオーデンとは生涯を通じた友人となる。1930年、卒業と同時に最初の結婚をし、バーミンガム大学の古典文学の助講師となるが、5年を経ずしてこの結婚は破綻する。一方、1935年には第二詩集 *Poems* を、当時T.S. エリオットが編集者であったフェイバー・アンド・フェイバー社から出す。1936年からのロンドン大学講師時代に、*Autumn Journal* (1939) などの詩集を矢つぎばやに出版している。1941年、BBCの特別番組制作部 (Features Department) に移り (その直後に二度目の結婚をしている)、おもにスクリプトを書く仕事をする。かたわら、*Springboard* (1944)、*Holes in the Sky* (1949)、*Ten Burnt Offerings* (1952)、*Autumn Sequel* (1954)、*Visitations* (1957)、*Solstices* (1961)、*The Burning Perch* (1963) といった詩集を出版している。1963年、自作のラジオ劇の収録のために出かけたヨークシャーで肺炎にかかり、1週間ほどの入院ののちあっけなく亡くなった。なきがらは北アイルランド、ダウン州キャロウドアにある母の墓に一緒に葬られた。

第1日

2007年9月12日水曜日

初日は午後からのふたつの講演で始まった。最初はオックスフォード大学のジョン・ストールワージー (Jon Stallworthy) による 'Louis in Love' である。著書のひとつとしてマクニースの伝記 *Louis MacNeice* (1995) がある。ストールワージーは1935年生まれ、8名の講演者の

中で最年長であり、皆から尊敬を受けていたが、本人は飾らない気さくな人柄のように思われた。

2 番目の講演はケンタッキー大学のジョナサン・アリソン（Jonathan Allison）による “‘Ink is a God-damned frigid medium, isn’t it?’: Reading Louis MacNeice’s letters’ である。アリソン編の書簡集 *Letters of Louis MacNeice* が 2010 年 5 月、フェイバー・アンド・フェイバーから出版されている。

休憩をはさんだのち、オックスフォード大学のピーター・マクドナルド（Peter McDonald）による基調講演が行なわれた。タイトルの ‘The Pity of it All’ はマクニースの詩 ‘Cradle Song for Eleanor’ の一節からとったもので、たいへん力のこもったすばらしい講演は、聴衆に大きな感銘を与えた。ピーター・マクドナルドは、2007 年フェイバー・アンド・フェイバーから出版されたマクニースの *Collected Poems* の編者である。

3 つの講演の終了後、大学のビジター・センターで、BBC によるマクニース展の開始を告げる催しが行なわれた。‘Castles on the Air’ と題されたこの展覧会では、マクニースの生涯を写真や詩の引用を交えて解説した 10 枚ほどの大きなパネルが用意されていたが、とくに BBC との関わりを描いた部分は詳しく、貴重な写真や資料も見ることができた。ワインがふるまわれるなか、主催者である BBC の責任者のスピーチがあった。BBC の制作による、*Castles on the Air: The life and work of poet and broadcaster Louis MacNeice* とのタイトルの、有益な内容のセンスのよい冊子が配布された。大学側の学会主催者のひとりから、3 日間のカンファレンスのあいだ BBC が番組のための取材を行なう、については BBC の大きな文字のついた黄色いヴァンを目にしたら、取材に協力してもらいたいとのあいさつがあった。翌日かその次の日、学会で知りあったフランス人研究者と大学構内を歩いていると、前方に当の黄色いヴァンが止まっているのが目に入った。私たちの先方をやはり 2 人連れの参加者が歩いていたが、彼らは急に向きを変えてわき道に入ってしまった。連れのフランス人が言うには、BBC の車を見て、つかまらないように逃げたのだ。こういう場合の行動は西洋人も日本人も変わらないのだなあと、おかしく思った。そしてもちろん私たちも、横道へと曲がったのである。

このセレモニーが終わると、もう夕方 7 時前である。しかし行事はまだ続く。次は場所を移してのポエトリー・リーディングだ。場所は、案内図によると、大学の正面から道を隔てて斜め向かいにあるエルムウッド・ホールというところである。地図を片手に見回すが、そこには教会らしい建物しかない。それもそのはずで、もともとこの建物は 19 世紀半ばに長老派の教会として建設されたものなのである。尖塔をもったゴシック様式の建物である。現在はクイーンズ大学の所有になっており、教会としての役目は終えて、コンサートなどの催しに使われている。これから 3 日間、毎夕ここがポエトリー・リーディングの舞台となる。

第 1 日目はポール・ファーレイ（Paul Farley）、シニード・モリシー、ドン・パターソン（Don Paterson）、ポール・マルドゥーンの 4 人の詩人が登場し、自作の詩を幾篇か朗読する。

最初の3人は30代後半から40代の若手詩人だ。ポール・ファーレイはイングランド在住で、ホイットブレッド賞（2002年）の受賞歴がある。シニード・モリシーは北アイルランド生まれで、現在シェイマス・ヒーニー・ポエトリー・センターで創作を教えている。処女詩集を対象にしたパトリック・カヴァナー賞を1990年に受賞し、2005年にはT.S.エリオット賞の最終候補になっている。また2007年には‘Through the Square Window’でナショナル・ポエトリー・コンペティションの受賞者となっている。日本に住んだこともあるということだ。ドン・パターソンはスコットランド在住、1997年と2003年の2回T.S.エリオット賞を、2003年にはホイットブレッド賞を受賞している。

ポール・マルドゥーンがこの日のスターだろう。1951年に北アイルランドで生まれた、クイーンズ大学の卒業生である。マクニースと同じく、BBCで働いた経験を持つ。1987年にアメリカに渡り、現在はプリンストン大学で教えている。1999年から2004年まで、オックスフォード大学詩学教授をつとめた。T.S.エリオット賞、グリフィン賞、ピューリツァー賞の受賞歴がある。出版された詩集は30冊におよび、その他批評や翻訳等、多数の作品がある。詩選集の編纂も行なっている目利きでもある。

ポエトリー・リーディングの後、北アイルランドのアーツ・カウンスルが置かれているマクニース・ハウスでレセプションが催されることになっている。その建物はもともと19世紀末にベルファストの裕福な茶商人が自宅として建てたものだが、一時チャーチ・オブ・アイルランドの主教館となり、ルイ・マクニースの父が主教であったときそこに住んだことから、2001年マクニース・ハウスと名付けられた。マクニースの詩‘Snow’がここで書かれたという伝説が有名である。その詩をマクニースが書いたという部屋は、ポール・マルドゥーンの詩‘History’にも登場する。

レセプションは予定では8時半からということになっているが、空腹をかかえてここまで歩いて来た数十人は、建物の由来を聞き、件の部屋を見学し、会話の種が尽きても、いこうに食べ物にありつけない。皆疲れ切って会話も途切れがちになったところ、巨大な容器に入れられた3種類のシチューがホールに運び込まれた。学会のレセプションというと、オードブル程度のものを想像していたので、これには他の参加者もちょっと驚いた。付け合わせの米とともに皿に盛ってもらい、大勢の人でごった返すなかなか座れる場所を見つけて美味しくいただいた。もちろんデザートとコーヒーまで。宿舎となっているストランミリス・カレッジの学生寮に戻ったのは深夜であった。

第2日

9月13日 木曜日

午前は2つの講演と研究発表、ドキュメンタリー・フィルムの上映にあてられている。第1の講演はダブリンのトリニティー・カレッジ教授テレンス・ブラウン（Terence Brown）に

よる ‘Weaving his Journey: MacNeice & Travel’ である。テレンス・ブラウンは北アイルランド出身だがダブリンのトリニティ・カレッジで教育を受けている。長年トリニティ・カレッジで教鞭を執っており、アイルランドの英文学界ではいわばドンのような存在である。西海岸のスライゴで毎年開かれるイエイツ・サマースクールで1994年、テレンス・ブラウンのセミナーを1週間受けたことがあるので、期待がふくらむ。

この日の夕刻、学会行事のひとつとして、出版記念会が催されることになっていた。プログラムには ‘Book launch’ とあるだけで、何の本かは書かれていない。始まってみると、テレンス・ブラウンに捧げられたエッセイと詩からなる本であった。⁽²⁾ エッセイあるいは詩を寄稿しているのは、今回の学会の組織委員長であるエドナ・ロングリーのほか、シェイマス・ヒーニー、デレク・マホン、ポール・マルドゥーンといった学会参加者、オックスフォード大学の売れっ子アイルランド史教授R.F.フォスター（R.F. Foster）、ユニバーシティー・カレッジ・ダブリンのアングロ・アイリッシュ文学教授デ克蘭・カイバード（Declan Kiberd）、ハーバード大学のヘレン・ベンドラー（Helan Vendler）といった錚々たるメンバーである。この本の出版はテレンス・ブラウン本人にもこの場で初めて知らされたようで、エドナ・ロングリーの祝辞を受けたテレンス・ブラウンは感動した面持ちであった。

第2の講演は、ロンドン大学のクレア・ウィリス（Clair Willis）による ‘Post-war MacNeice’ である。彼女には *Improprieties: Politics and Sexuality in Northern Irish Poetry* (1993), *Reading Paul Muldoon* (1998), *That Neutral Island: A Cultural History of Ireland during the Second World War* (2007) 等の著書がある。

講演のあとは3部屋に分かれて研究発表が全部で9つ、同時間帯に大学のドラマ&フィルム・センターでドキュメンタリー・フィルムの上映があった。フィルムは ‘Night Mail’ (1935), ‘Coal Face’ (1935), ‘Listen to Britain’ (1942), ‘Family Portrait’ (1951) の4つの短編で、最初の2篇はマクニースの友人である詩人W.H.オーデンが制作にかかわっている。研究発表は3つの部門に分かれており、それぞれのテーマは ‘Irish Patrimonies’, ‘Other Countries’, ‘Precursors’ である。‘Irish Patrimonies’ の部屋で、3つの発表を聞いた。

昼食をはさんで午後の最初のプログラムはポール・マルドゥーンの講演 ‘The Perring Birch: Yeats, Frost, MacNeice’ である。タイトルは、マクニースの最後の詩集 *The Burning Perch* をもじったものである。講演前にちょっとした出来事があった。会場で座って開始を待っていると、隣の席にポール・マルドゥーン本人が座ったのである。しかも、プログラムを見せてほしいと言う。もちろん喜んでお見せしたが、それはなんと自分の講演のタイトルを確認するためだったのだ。曰く、「確認しておかないと、どんな話をするのだったか忘れてしまうからね。」売れっ子になるとそんなものなのかと、妙に納得してしまった。しかし、もちろん講

(2) *That Island Never Found: Essays and Poems for Terence Brown*. Eds. Nicholas Allen and Eve Patten, Four Courts Press.

演の内容は、ユーモアを交えてはいたがしごくまじめなものだった。

このあとはコーヒープレイクをはさんで ‘Poets’ Panel’ の催しである。昨晚詩を朗読した4人の詩人のうち、ポール・マルドゥーンをのぞく、ポール・ファーレイ、シニード・モリシー、ドン・パターソンの3人がそれぞれ自分の詩について、またマクニースからの影響について話した。

その後、前述の出版記念の催しがあり、夕方は前日と同じエルムウッド・ホールでポエトリー・リーディング。この日はニック・レアード (Nick Laird)、サイモン・アーミテージ (Simon Armitage)、リチャード・マーフィー (Richard Murphy) の3人である。ニック・レアードは1975年北アイルランド生まれ、これまでに2冊の詩集を出している。サイモン・アーミテージは1963年ウェスト・ヨークシャーの生まれで、多数の詩集のほかに小説、劇、オペラ、ラジオ・テレビのシナリオも書いている多芸多才の作家である。リチャード・マーフィーは1927年生まれ、少年時代を植民地の高級官吏であった父の赴任地であるセイロン（スリランカ）で過ごすという経験を持っている。80才を超えた現在もかくしゃくとしていて、ダブリンと南アフリカを行き来しているそうである。

この日の夜は British-Irish Secretariat 主催のレセプションが予定されている。昼間、学会責任者のエドナ・ロングリーから、レセプションに出席できるのは名簿に名前がある（つまり、住所氏名、所属等を記した学会参加申込書を前もって提出しており、British-Irish Secretariat が身元を把握できている）人たちだけであるとのアナウンスがあり、ひとりひとりわざわざ名簿で確認をとったので、British-Irish Secretariat とは北アイルランドの政治状況と関わりのあるところだろうと推測された。ポエトリー・リーディング終了後、数十名の出席者はエドナ・ロングリーに率いられて、といっても実際は思いおもいのグループになってばらばらと、市の中心部に向かって歩き始める。そばを歩いている地元の参加者に British-Irish Secretariat ってなに？と聞いてみるが、はっきりした返事はかえってこない。ここはプロテスタントとカトリックが激しくぶつかってきた街である。外国人である筆者にはプロテスタントとカトリックの見分けがつかないうえ、微妙な話題らしいと感じたので、それ以上尋ねるのはやめておいた。昼間の、アイルランドには珍しい、厳重な手続きがあったので、会場に入るのにひとりずつチェックされるものと思っていたが、案に相違して、到着してみると玄関ホールで少し待ったけれどもあとは皆勝手にどんどん入って構わないのであった。この辺がいかにもアイルランドらしいと思ったものだ。

調べてみると、British-Irish Secretariat は、1998年にイギリス政府とアイルランド政府とのあいだに結ばれた、北アイルランドに関する合意文書（Good Friday Agreement もしくは Belfast Agreement と呼ばれている）によって設置されたイギリス・アイルランド協議会（British-Irish Council）の事務局である。カトリック、プロテスタント双方の武力組織が武装放棄し、和平プロセスが進行中であるので、そのプロセスのひとつとしてこのような学会へ

の支援が行なわれたのかもしれない。

British-Irish Secretariat は市内中心部のウィンザー・ハウスという高層ビルの中にあった。ウィンザー・ハウスは23階建て、80メートルの高さがあり、南北アイルランドを通じて今のところ最も高い建物だそうである。会場はその上層階、夜のベルファストが見晴らせる大広間である。レセプションそのものは British-Irish Secretariat の誰かが出てきてスピーチをするということもなく、まずワインが専用のテーブルに用意され、皆はしばらく立ったままベルファストの夜景など眺めたりしているが、それにも飽きると誰からともなく適当にテーブルに着く。それからまたしばらくしてから、やっと料理が運ばれてくる。今度は料理専用のテーブルに料理が用意され、出席者は銘々皿を持って並んでよそってもらう。日本でよくあるビュッフェと違うのは、入場したときにはまだ料理が並んでいないところである。

筆者が着席した大きな丸テーブルには10名くらいが座った。隣は件のフランス人、その先にひとりおいて詩人のデレク・マホン、さらにマホン夫人が座っている。フランス人研究者はデレク・マホンと話している。筆者は右隣に座っている、南から来た3人組のアマチュア詩人たちと話して過ごした。あとで聞くと、フランス人研究者は、気むずかしいことで知られているデレク・マホンと長時間彼の詩について話することができてとても興奮したという。

第3日

9月14日金曜日

第2日と同じく、午前は2つの講演と研究発表、ドキュメンタリー・フィルムの上映が行なわれる。最初の講演はオックスフォード大学のバレンタイン・カニンガム（Valentine Cunningham）による‘MacNeice and Thirties Classical Pastoralism’、第2講演はリバプール大学のニール・コーコラン（Neil Corcoran）による‘The Same Again?: Repetition and Refrain in MacNeice’であった。

休憩をはさんだのち、パラレル・セッションとして、3室に分かれてそれぞれ‘Modernism & Mobility’、‘The Thirties & Autumn Journal’、‘Reputation & Reception’をテーマとする研究発表が全部で10、ドラマ&フィルム・センターではドキュメンタリー・フィルムの上映が行なわれる。この日のドキュメンタリー・フィルムは1953年制作の、ヒラリー卿によるエベレスト初登頂を記録した *The Conquest of Everest* である。ナレーションの原稿をマクニースが書いたというので、これを見ることにした。大変有名な映画で、アカデミー賞にもノミネートされたものだというのが、連日の深夜に及ぶ行事の疲れのせいか大半を眠って過ごしてしまった。

午後最初の催しは‘Poets’ Panel’で、昨晚ポエトリー・リーディングを行なったサイモン・アーミテージ、ニック・レアード、リチャード・マーフィーの3人、それとこの日朗読を行

なう予定のトマス・マッカーシー (Thomas McCarthy) がそれぞれマクニースの詩について語った。

この日はふたつめのパラレル・セッションがあり、‘MacNeice & Other Arts’、‘Art and Politics’、‘Changing Aesthetics’、‘Contemporaries & Successors’の4つのテーマのもとに14の研究発表が行なわれた。このうち、筆者は‘Art and Politics’の部屋に出席した。

このあと、ホワイエで、マクニースの詩集のほとんどを出版しているファイバー・アンド・フェイバー社による、マクニースの自伝 *Strings are False* の改訂版の出版記念会があった。この新版はデレク・マホンが新しく序文を寄せたものである。

夕刻、最後のポエトリー・リーディングである。この日の詩人はトマス・マッカーシー、メーヴ・マガキアン、マイケル・ロングリー、デレク・マホンの4人。トマス・マッカーシーは1954年ウォーターフォードの生まれ、現在はコーク在住である。メーヴ・マガキアンは1950年ベルファスト生まれ、クイーンズ大学で教育を受け、中等学校教師を経て、現在はクイーンズ大学で創作を教えている。ポール・マルドゥーンの編になる *The Faber Book of Contemporary Irish Poetry* (1986) に取り上げられている10人の詩人のうちのひとりである。

マイケル・ロングリーは1939年ベルファスト生まれ。ダブリンのトリニティ・カレッジで学んだのち、教職を経て北アイルランドのアーツ・カウンシルに勤める。2007年から2010年まで、Professor of Poetry for Ireland に指名されている。シェイマス・ヒーニー、デレク・マホン、ポール・マルドゥーンらとともに、1960年代に注目され始めた「ベルファスト・グループ」のひとりである。

デレク・マホンは1941年ベルファストの生まれ。ダブリンのトリニティ・カレッジを経てソルボンヌに留学する。カナダ、アメリカに住んだのち、ダブリンとロンドンでフリージャーナリストとして働いた経験を持つ。詩作品のほかに、フランス文学の翻訳もある。マイケル・ロングリーは、デレク・マホンの詩才を示す次のようなエピソードを書いている。マクニースの死後、マホン、ヒーニー、ロングリーの3人がキャロウドアのマクニースの墓を訪れた、そのあとのことである。

When the three of us were next together Mahon took from his pocket ‘In Carrowdore Chuchyard’⁽³⁾ and read it aloud. Heaney started to recite his poem, then crumpled it up. I wisely decided then and there not to make the attempt. Mahon had produced the definitive elegy.⁽⁴⁾

この日の最後の行事はクイーンズ大学の「グレート・ホール」で催されたカンファレンス・ディナーである。この日は学会の正式ディナーということで、着席している出席者のところに一皿ずつ料理が運ばれてきた。立派な大ホールには歴代学長の肖像画が掛けられていたが、一番目立つところはシェイマス・ヒーニーの大きな肖像が占めていた。ヒーニーはク

(3) この詩は Derek Mahon, *Selected Poems 1962-1978* (Oxford University Press, 1979) に収録されている。

(4) *Louis MacNeice: Poems selected by Michael Longley* (Faber and Faber, 2001), p.xi.

イーンズ大学の出身なのである。

第4日

9月15日土曜日

この日はバス2台を連ねてのツアーである。まず最初に訪れたのはキャロウドアのクライスト・チャーチ。もちろん、マクニースの墓に詣でるためである。シェイマス・ヒーニー、デレク・マホン、マイケル・ロングリーのほかに、ジョン・ストールワジーらも参加していて、マクニースの墓を囲んでスピーチと詩の朗読があった。またこの日はマクニースの娘のコリーナが加わっていた。彼らの談笑する姿から、詩人であると大学の研究者であるとを問わず、皆が対等な友人として幸福な文学的サークルを形成していることが感じられた。コリーナは、マクニースの両親の出身地であり、ことにマクニースの母が恋しがっていたコネマラから持って来たとあって、フクシアの花で作った花輪を墓に飾った。墓のそばにもフクシアが植えられており、ちょうど花を咲かせているところだった。（フクシアはアイルランド西部ならどこでも見られる、西部を象徴する花である。）

またバスに揺られて、今度はマクニースが子供時代を過ごした思い出の地、キャリックファーガスを訪ねる。おりから、マクニースの生誕100周年を記念して町のミュージアム&シビックセンターでマクニース展が開かれるところで、私たちの訪問にあわせて開会式が行なわれることになっていた。シビックセンターではたっぷりとした昼食が準備されていて、それをいただきながら市長のオープニングスピーチを拝聴した。

その後、マクニースの父が教区司祭をつとめたセント・ニコラス・チャーチを訪れた。案内役の男性から、マクニースの詩‘Carrickfergus’の、‘... built a church in the form of a cross but denoting / the list of Christ on the cross in the angle of the nave’という一節にある、教会の建物が十字架にかけられたキリストの傾いた首を表わしているということの意味を教えてもらった。それは、教会の身廊を平面図として見ると、十字架の頭に当たる部分が下の部分とまっすぐつながっておらず、横木にあたる部分を境に少し方向が曲がっていることを言っているのだという。実際に訪れてみないとなかなかわからないことである。残念ながら、マクニースが育った司祭館のほうは、1987年に取り壊されて残っていないということだ。

これからまたバスに乗って、クイーンズ大学に帰るのだが、ここで目撃したあることが強く印象に残っている。バスは2台だが、参加者は大学に帰る人たちの組と、宿舎になっているストランミリス・カレッジに帰る人たちの組とに分かれる。ふたつの場所は、歩くと30分近くかかる距離だ。皆はどうやって宿舎に帰るかということまでこの時点では考えていなかったと思う。バスの1台に乗り込もうとすると、ちょうどエドナ・ロングリーが運転手と何か話をしている。運転手に、バス1台をストランミリス・カレッジまで行くようにしてくれないかと言っているのである。偉い学者の、この細やかな心遣いに感謝の念を覚えたが、

驚いたのは運転手の対応である。大学まで行くようにしか言われていないからと言って、渋っているのである。というより、不機嫌に、そんなこと知ったことか、という調子である。アイルランドのバスドライバーは、経験上ほぼ例外なく愛想がよく、おしゃべりで親切なので、これにはびっくりした。と同時に、ここは北アイルランドなのだと思います。あくまで想像だが、この運転手はたぶんカトリック居住区に住んでいて、運転手の仕事に満足しているわけではない。片や、客は大学教授という（多くはプロテスタントの）エリートたちである。そこから来る反感がこのときの運転手の対応に表われたのではないか、そんなことを考えさせられた一コマであった。結局、気持ちよくではないにしても、とにかく1台はストランミリスまで行ってもらえることになったようだ。カトリックであれプロテスタントであれ、ここには日々小さな不愉快を重ねながら、それでもなんとか共にやっていくことをあきらめない人たちがいるのだ。

さて、あとは市庁舎で行なわれるベルファスト市主催のディナーを残すのみだ。正式な招待状も受け取っている。市庁舎は、ベルファストの街の文字通りど真ん中にある、ドームを頂いた壮麗な建物で、その前庭には昼間は大勢の観光客がたむろしている。内部は案内つきで見学もできる。その建物の中にある、メインホールの入り口で、首に正装のチェーンをかけた市長にひとりひとり迎えられて席へと進む。別室でワインがふるまわれたあとのことである。皆が着席すると、まず市長の挨拶。その中で外国から、遠くは日本からも、大勢の客を迎えられて喜ばしいと言及されて、こそばゆい思いをした（日本人は2人だった）。市長のスピーチが終わると、それに応えるマイケル・ロングリーのスピーチ、さらにキアラン・カーソン、シニード・モリシー、シェイマス・ヒーニーによる詩の朗読が続く。食事は弦楽四重奏団による生演奏つきである。このようないわば市を挙げての歓待は予想外だったが、これも和平が進みつつある今、文化をひとつの資源として市を盛り上げようという気運のあらわれだったかもしれない。それにしても、これが日本であつたらどうだろうかと思いついてしまう、それほど徹底的に考えられた演出であった。この日のことを含め、すべてをコーディネートしたのが、エドナ・ロングリーだと思うと、その誠意と静かなエネルギーに大きな尊敬の念を覚えたのである。

この学会の記録および講演、ポエトリー・リーディング等の音声は次のURLで閲覧・聴取可能である。

<http://www.qub.ac.uk/schools/SeamusHeaneyCentreforPoetry/LMN/>